HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	チベットアムド地域ワォッコル村におけるルロ祭とその歴史的背景
Author(s)	喬旦, 加布
Citation	研究論集, 12, 103(左)-136(左)
Issue Date	2012-12-26
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/51963
Type	bulletin (article)
File Information	006_QIAODAN.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

チベットアムド地域ワォッコル村における ルロ祭とその歴史的背景

喬　旦　加　布

要　旨

チベット人地域のうち，本稿ではチベット高原東北のアムド[1]をとりあげる。アムド文化の中心地レプコン地方は，昔から辺境部落や国境の紛争地に位置し，半農半牧の多民族集居の地方である。

旧暦6月はチベットアムド地域では小麦など穀物の収穫期である。この時期，同仁県（レプコン地域を指す）を中心とした，隆務川中域のワォッコル村などでは，最も伝統的なルロ祭という祭祀儀礼が行われる。

これらの村は，ワォッコル村を中核とし形成されており，かつて同じ骨系を持つと考えられている地縁集団である。具体的には，ワォッコル村と，隣接するハラバトル村とガセドゥ村であり，この三村の崇拝対象となる諸神は兄弟関係を持つ。しかし村によって祭祀の実践方法には違いが見られ，それぞれ独特の特徴が見て取れる。

この祭事（3日から5日にかけて）では村人がマホンカン[2]に集まり，老若男女が晴着を着て積極的に祭りに参加する。現地のことわざでは「お正月しか良い物を食べず，ルロ祭りしか良い衣服を着ない」と言うほど，重要な祭りである。当日は，ハワ[3]の下で，神々への感謝の意をこめて伝統的な神舞，龍舞，軍舞などが演じられ，民謡が歌われ，大量のケルサンとマルサン[4]の供物が供えられる。

対象となる神々は，仏教以前の自然崇拝から生まれたものであり，「チベット人の自分たちを取り巻く山河に数知れぬツェン（btsan），ニェン（gnyan），サダク（sa bdag 地主神），ル（klu 竜）などの霊気は天空に満ち，荒ぶる神々の怒りを鎮め福を招く」（奥山 1991：133）とされる。これらの祭事は，ハワを通して神々の意向をうかがい，犠牲を捧げて祈るという民間信仰の形態をあらわしている。

ワォッコル村の主神はダルジャ神であり，ダルジャ神山がある地域はかつて唐と吐蕃の間で抗争が繰り返された地域である。平和を求めて両国間では783年と821年の2回に渡って，「吐蕃は吐蕃に安らかに，唐は唐において安

らかになさん」（石濱 1999：44-45）という会盟が行われ，その決議文は碑文に刻まれて残った。唐蕃将兵らはチベットの習慣に基づいて，ケルサンとマルサンをワォッコル村の主神であるダルジャ神にささげ，不戦，災難防除，安居楽業などを祈る儀式を行い，羊皮・牛皮の太鼓をたたき蕃唐盟約を祝った。これがルロ祭の始まりとされる。

現在，ルロ祭では，ダルジャ山神に感謝の意を表すため，弓・刀・矛・太鼓などの武器と軍旗を持って唐蕃時代の服装をし，長時間にわたる複雑な軍舞を演じる。この一連の舞踊は，唐と唐蕃との戦争の過程や部落の紛争，村の歴史等を再現していると考えられる。

1．はじめに

本稿は，2011 年 12 月 12 日―13 日にかけて北大で開かれた COE チベット文化に関する国際ワークショップで筆者が，「中国青海省同仁県ワォッコル村におけるルロ祭とその歴史的背景」というテーマで発表した原稿に加筆したものである。

現在，中国青海省同仁県（チベット語でレプコン）には，ルロ祭（中国語で六月会）という，チベットでもアムド地域でしか行われていない独特な祭祀儀礼が残されている。祭りの中には，マルサンという山羊や羊などの生き物を捧げる祭事，男の若者が数本の針を頬と背中に刺しその血を捧げる行事，また，ハワがトランス状態に入り，ナイフで頭を傷つけて踊るなどの行事がある。そこには原始宗教やボン教の要素が見られる。他にも，7 世紀から 8 世紀にかけての唐と吐蕃間の戦争，あるいは 13 世紀から 17 世紀に至るモンゴル族や漢民族などによる支配，部落間の抗争，村の由来と歴史，伝統的な生産と宗教のありよう，そして人々の世界観などが反映されていると考えられる。

筆者の意図は，青海省黄南チベット族自治州同仁県ワォッコル村における現在のルロ祭と，その成立の歴史との結びつきを明らかにすることにある。同地域は，唐と吐蕃国両国の国境地帯に位置することから，歴史的，地理的に重要な地域であると思われるにもかかわらず，ルロ祭に関する従来の研究では，あまり扱われてこなかった。

本稿における調査方法は，文化人類学的アプローチに基づいたフィールドワーク，すなわち現地での参与観察と聞き取り調査を主としている。また，カメラやビデオなどを用いて視聴覚資料の作成を行い，収集したデータの整理と分析，考察を行った。さらに，同村に関する史料が非常に少ないことから，隣村の歴史や，ルロ祭に関連のあるチベット語および漢語史料などの文献調査も行った。農民のほとんどは文字の読み書きができないため，書面によるアンケート調査は実施せず，同村の年配者とハワからの聞き取り調査を主とした。また，神々の口承伝説と祭の象徴などについて村民に聞き取り調査を行った。調査は，2010 年 8 月 3 日から同年 9 月 13 日と 2011 年 7 月 18 日から同年 9 月 20 日の 2 度にわたって行った。

2．調査地概況

2-1．ワォッコル村の歴史

調査地である青海省同仁県保安鎮ワォッコル村は中国青海省の東南部に位置し，漢族の村と隣接しており，古代には西羌部族が住んでいた地域である。「紀元 310 年頃今の同仁地域を吐谷軍が一時期統治されたが，670 年には吐蕃王国の勢力により滅亡した。その後，同仁地域は唐と吐蕃との争う地域になり，安史の乱のきっかけで吐蕃軍が東に進攻し，同仁地域は完全に吐蕃軍の軍事要地になった」(黄南州概況 2008：79)。8 世紀からは吐蕃王国の支配下におかれ，長く吐蕃軍の軍事拠点となった。「元代には，保安宿駅が置かれ，明洪武四年 (1371 年) に，明軍の保安堡塁を建築し，明永楽九年（1411 年）同仁県に吾屯，季屯，李屯，脱屯等の 4 屯の駐屯地が置かれた。(後に同県の 4 つの土族の集落になった)。その中の脱屯は保安城の前身である」(董克義 2009：44)。

歴史上，土族がチベットだけでなくモンゴル族や漢族からの影響を強く受けてきたことは，同村の村人が日常会話にチベット語と土族語両方を用いていることから推測される。「土族はチベット文化の影響を強く受け，外見上はチベット族と変わらないが，モンゴル語の一種を話し，4 世紀から 7 世紀にかけて歴史に登場する吐谷渾（とよくこん）の後裔ではないかとみなされている」(宮本 2009：2)。

伝承によれば唐代，吐蕃兵がこの地にやってきて駐屯した。この地域には「父はチベット人，母はモンゴル族や漢族」(服部 2008：21) という言い習わしがあり，これは吐蕃兵が唐軍に属する女子を略奪したことを示している可能性がある。「また，さまざまな伝承や遺物などから，明代の 14 世紀，少なからぬ内地の漢族が屯田兵として同仁県に移住したことがわかる。同仁県は漢文化とチベット文化融合の地であり，その橋渡し役をしたのが土族と考えられる」(宮本 2009：2)。トゥジャ・ワォッコル村はハラバトル村とガセドゥ村に隣接している（図 1-1)。前述したようにこれら 3 つの自然村は兄弟関係を持ち，村人により崇拝される主神も 3 兄弟であると認識されて来た。それを示す物証は現在のところ見当たらないが，3 村の創建と主神との関係について現地には次のような言い伝えがある。

かつて，アニ・ツムバ，アニ・バジャ，アニ・シャメの三兄弟がおり，当時ウ・ツァン（ラサ・シガツェを中心としている地域）からやって来て土地や河川を分割し，各村に住み始めた。やがて，アニ・ツムバはワォッコル村を，アニ・バジャはガセドゥ村を，アニ・シャメはハラバトル村を創建した。三兄弟がいた当時，三村全体の主神はアニ・ダルジャであったという。

ワォッコル村の主神は現在もアニ・ダルジャのままであるが，ガセドゥ村の主神はアニ・バゾン，ハラバトルの主神はアニ・ヘルーランというように神々の名前は変わっている。ただし，三村の廟内にそれぞれの三兄弟の神が祀られている。

ワォッコル村の形成年代は明らかではないが，その手がかりはある。ワォッコル村では自村

をワォッコル・ツムパと称する。「ツムパ」はチベット人 18 大氏姓のひとつで，のちに姓を地名にしたという。さらにこの村の人はモンゴル語系の土語を用いるので土族であると思われる。現在の言語と外見，血縁などが異なる原因について確実なことはわからないが，古寺の遺跡で「トンガタン」(チベット語で法螺貝の意味) と呼ばれる場所には現在弥勒殿があり，これは「トゥジャ四柱」と呼ばれる 4 人の僧侶が建てたものである。弥勒殿の門前には石碑（年代不明）があり，「皇帝は，この場所はトゥジャ・ワォッコル寺のものであり，政府に城塞と飲水を貸しただけで，通路以外はいかなるものも使用しない」と書いてある。いま「トゥジャ・インファン」と呼ばれるところにはそのころの軍の城塞遺跡があり，古寺の背後には，ラマ山（チベット漢混合の名前）とよばれる山があり，これはチベット語ではワンダイカン（僧侶山）あるいはラトゥトゥルである（ラマツィラン 2002：45)。

そのため山名また村名トゥジャ・ワォッコルからすれば，ワォッコル村は少なくとも 800 年の歴史をもつといえる[5]。なお，トゥジャという呼称の由来は，この村の後山にアニ・ユント神山と南下部にあるワンダィガン（僧侶山）があり，東南部にアニ・マンドゥ薬山，南部にアニ・アジャ神山とアニ・バゾン神山などに囲まれていることによる。

村の由来に関してはその他にも，いくつかの伝説がある。トゥジャ・ワォッコル村は，ユント神山の南下部にあるワンダィガン（僧侶山）の麓にある。8 世紀の初期（紀元 709 年）トゥカルタン（トゥカル泉ともいう）に，吐蕃・羌族・ツムパなど三つの氏族部落が共住していたが，その後次第に大小の 9 組になり (現在この村は 9 部落で構成する)，14 世紀の末に現在の場所に移転して来たという。村名もその時にワォッコル・ツムパとなり，首領はツムパ組であった。このツムパについては，吐蕃王国の将軍であり，タルジャツォ（ダルジャ湖）からやって来たという伝説がある。さらに別の伝説では，フブェレ王の時，モンゴル軍がチベットのウツァンから漢地に帰る時，各地から強制移住させて来たチベット族，漢族，回族（ムスリム）などの人々を隆務河とジャン川の周辺に住まわせて，異民族の間に強制的に婚姻関係を作ったため，各チベット族部落と漢族部落，回族部落などが一緒に住むようになり，その後一つの村落になって村名はトゥジャ・ワォッコル（チベット語の意味はチベット部落）になったという。現在，漢族は隣接の城外，城内漢村（後述）に住む。回族は後述のような原因で甘粛省臨夏県積石山の方へ移住した。

ここでワォッコル村周辺における回族や漢族との関係について述べる。『安多蔵族通史』には，回族がレプコン地域に移住してきたのは，明代の 1411 年であるとの記述がある。それ以前は本地域に回族はいなかった。清朝の 1865 年，レプコン地域で漢族と回族の間に衝突が起きた。さらにその後，回族と当時のワォッコル村を含めたマパ 7 村のチベット族との間に，土地や灌漑用水の領有権を巡って，何度もトラブルが発生した。それにより関係が次第に悪化，集落間での大規模な衝突に発展した。両民族ともに多くの死傷者が出たが，とくに回族はそうした衝突から次第にレプコン地域での居場所を失い，現在の甘粛省臨夏回族自治州積石山保安族東郷族

自治県に移住した。それらはその地名から保安族と称される（ジュメサンチエ 2011：25）。

また，漢族は明代の 1411 年以降，移住政策の実施によって徐々に青海省の民和県，甘粛省の臨夏州，山西省から現在の保安地域に移住を始め，それにより漢族の村が形成された。その後，1574 年には四川省保寧府から派遣されてきた軍隊が本地域に駐屯し，軍の城塞を築いて住み始めた。その軍隊の職務は現地の治安を守ることであった。また，低地の漢民族も泥棒や強盗から村を防ぐために城塞を建築し，城内漢族村を形成した。清代の 1725 年には保安軍隊と山西河州軍隊が合併され，その 4 年後の 1729 年には保安軍隊が解散したため，兵士らが地元の農民になり，自給自足の生活をせざるをえなくなった。それにより，漢民族の村は次第に拡大していった（ジュメサンチエ 2011：24）。「保安鎮は伝統的に交通の要所であり，唐によって同仁県の隆務鎮から保安鎮までの隆務河河谷は黒石川と呼ばれ，保安は交通の要街で唐蕃戦争の要害地であったため，唐の曜武軍がしばらく駐屯した」（劉満 2010：23）。

さて，これらの伝説に登場するツンパとワォッコル村について，『安多蔵族通史』には，「トゥジャ・ワォッコル村の祖先はチベットの 4 大氏―ドン氏に属す。ワォッコル・ツムバという呼称は今日まで使っている。」（ジュメサンチエ 2011：19）という記述がある。さらに，『チベット白史』によると「ツムバは昔チベット地域の小国であったが，吐蕃王朝が成立した時統一され，現在，ツムバの後裔たちはアムド地域に分散している」（ゲンドゥン・チュンペル　1980：9-10）とある。「8 世紀の吐蕃王レルパチェンの時アニ・ツムバ諸家族が今のワォッコル村があるところにやって来て生活を始め，次第に大きい村になったという。また，ハラバトル村とガセドゥ村，ワォッコル村の三村の祖先である三兄弟は吐蕃軍であり，吐蕃の時代に現在の青海省循化県のダルジャ湖の湖畔で戦争に大勝利し，後にこの地域を選んで住み始めた」（カルセジャ 2009：378）という記述もある。

すなわち，以上の伝説や歴史文献によれば，ワォッコル村の祖先はチベットの大ドン氏或いはその分家のツムバ氏である。吐蕃王国時代，この地域では唐と頻繁に戦争が起こり，吐蕃と唐双方が 8 世紀半ばに当地に城塞を設けた。したがって，ワォッコル村の祖先は，これら吐蕃軍の後裔か，吐蕃辺境防衛軍の後裔であると考えられる。吐蕃王朝が崩壊した後の元，明，清時代を通じ，この地に各王朝の屯田兵「保安四屯」がおかれたことで，モンゴル族や漢族などの移住が始まり，それらとの接触によって言葉や文化が変容したと考えられる。

現在の行事にもワォッコル村とツムバ氏との関係を示唆するものが見られる。例えば，毎年 12 月 29 日ワォッコル村ツムバ部落の人々がツムバ祖先の墓地に集まり，ゴレ（チベットパン）や線香など大量の供物を供える記念行事が今に至るまで残されている。ルロ祭の際にも 3 村の村人たちが集まり，三村の代表 3 人が「こちらはワォッコル・ツムバの居場所で，そちらはガセドゥバジャの居場所，あちらはハラバトルシャメの居場所である」と述べる。ここにはワォッコル村とツンバとの関係や，当時行なわれた不動産分配，および各村の境界設定といった歴史的事実が再現されていると考えられる。ワォッコル村は同仁県の県都隆務鎮からわずか 15 キロ

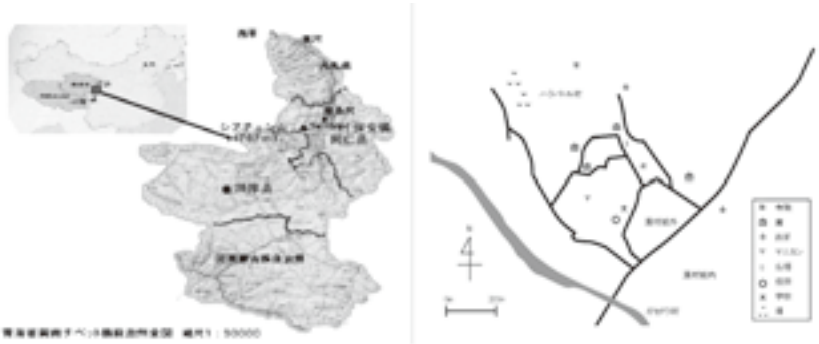

図 1-1　黄南チベット自治州全図とワォッコル村の周辺集落，主な施設

メートルの距離に位置し，青海省の省都である西寧市と甘粛省夏河県（ラブラン大僧院がある）の双方へ行くことが容易な交差点にあり，昔から「同仁地域への門戸」と呼ばれている。

現在のワォッコル村は 230 戸余，1,300 人余の規模である。現行行政区域としてのワォッコル村は同仁県の北部に位置し保安郷に属する。保安郷の総人口は 5,000 人程度で，そのうちチベット族は 64%を占めている。チベット族の他に漢，土，回族などが住んでいる。総面積は 102.9 平方キロメートルで，周囲には城内・城外漢村，ガセドゥ村，新城村，シャカルロン村，シャンチュ村，ツォドゥ村など 8 の自然村がある。民国 25（1936）年に西寧の馬歩芳政権が保安鎮を成立し，1950 年旧制の保安郷になり，1958 年の紅旗公社と 1960 年の保安公社を経て 1984 年に保安郷となり，2001 年麻巴郷と合併されて保安鎮となった[6]。

2-2．居住形態と生計

民家は一般に狭い路地を隔てて数戸が隣接して建てられ，ひとつのまとまりを形成している。村の後の山麓には僧院と仏塔，ラップツェ[7] が並んで建築されている。村の中央には，脱穀場および，ルロ祭などの伝統行事を行う会場に用いられる広場があり，そこにマホンカン[8]（将軍廟の意味）と呼ばれる廟が建っている。また，廟から 1,500 メール離れているところにマニカン（経車殿という意味）がある。

民家は，周囲を高さ 3 メートルから 4 メートルほどの版築の土塀で囲まれた，長方形の四合院風の構造を持ち，中庭を囲む三，四棟の木造建物で外壁は土壁，壁面が通路に直接面している。各戸の正門はほとんど東方か南方に面している。建物の中心部にチベット人民家に不可欠の仏間があり，庭園の一隅に，杜松の枝や小麦粉などの焚香を神に献納する瓶形の香炉がある。民家の奥には台所と食堂があり，客間や客用寝室，物置庫，穀物収穫物を貯蔵する部屋および農機具を置くための部屋もある。その他に正門内側の左右には，家畜小屋とトイレがある。また牛糞はパイ状に固めて壁に貼り付けて乾燥させ，燃料として用いられる。正門の頂点にタルチョ（五色の布に仏教の経文を印刷した旗）がおかれている。

隆務河沿いには耕作に適した平地が広がっている。主たる生業は現在純農業である。伝統的には放牧をともなう形態であったが，現在は多くの場合家畜は飼われていない。原因は，数キロ離れたアルミ工場の排煙によって，家畜の歯牙が抜けたためである。また荷役，耕作用の馬，騾馬，驢馬などは種まき機などの農業機器の普及により消え，その結果家畜のほとんどは，家族で肉や牛乳を消費するための豚と牛となった。主な農作物は小麦，大麦，アブラナ（菜種油用），大豆，ジャガイモであり，大根及び白菜，キャベツ，ネギなどの野菜とリンゴ及びナシ，アンズなどの果物も栽培されている。ほとんどの農家は，自給自足的生活を営んでいる。

一般的に女性は家事を担い，子供たちの成人後は高齢者の世話をする。男性は近くの工場などで農民工として働く。近年，農繁期以外は男女とも省内外に出稼ぎに出るか，冬虫夏草など薬草の採集販売及び工場などで働く人が増えている。また一部は，チベット伝統的民間工芸（絵師）と伝統的な医師として寺院内外で働いている。高等教育を受けた青年には，学校卒業後公務員及び社員，教師を務めている人が多い。

3．ルロ祭

3-1．ルロ祭の語意の解釈

旧暦 6 月，同仁県と貴徳県を中心にした隆務川中域のチベット族と土族の村々においては，伝統的なルロ祭が行われている。村によって崇拝の対象，祭祀のやり方，ルロ祭の内容や表現が違い，それぞれに特徴がある。ルロ祭の呼称はチベット語で① རྒྱ་རོལ། （ルロ）あるいは རྒྱ་ཏཱུ། （ルル）② རྒྱ་རོལ། （ルロル）③ དགུ་ལས། ཚེད། （マッツェ）④ ཏུ་ཀེ་ལེ་ལ། ཚེད། （トゥビ•ハツェ）などの用語を使用する。日本語ではそれぞれ，①竜舞，②歌舞，③軍舞，④神舞の意味である。漢語では〝同仁六月歌舞節，熱貢六月歌舞会，藏郷六月歌舞盛会〟などの表現が使われてきた。以下①～④について説明する。

① རྒྱ་རོལ། （ルロ）あるいは རྒྱ་ཏཱུ། （ルル）について。ランジャ村の伝説によると，昔ランジャ地方にアニ・アラク（a mes a lags）とよばれる人がいた。村の南を流れる川の水を村の北側の砂地に引こうと努力したが，灌漑設備の完成にはいたらなかった。のちに，谷間で泉が発見されたが，堆積する砂が厚く，水は遠くまで流れなかった。これはル（竜）によって起こされた怪異だとみなされた。そこでアニ・アラクは童男童女を集め，毎年六月に竜舞を踊り，歌って，泉の竜を喜ばせた。竜泉の近くに楊柳があり，竜の木とよばれた。子供たちはその楊柳にのぼり，枝を折って水遊びをした。それは竜退治を表していて，水を守り五穀豊穣を祈願する伝統的な習俗となった。

② རྒྱ་རོལ། （ルロル）について。ルロルのル（glu）は山歌という意味であり，歌舞を表すルガル

（glu gar）の簡略形である。རལ་は楽器を意味し，特に太鼓や銅鑼，法螺貝などの楽器を指す。また，ロル（rol）には，遊戯という意味と，変化（へんげ）の意味もある。ルロルで歌舞，娯楽などを幅広く表現する語となる。チベットアムド方言では ཉན་には「腐る」という意味があり，一部の村では，ルロ祭の時に若い男女たちが普段は禁じられている「情歌」を歌うから腐った歌であるとも言われている。

③ དམག་རྩེ།（マッツェ）について。ティソン・デツェン王のころ，吐蕃軍と唐軍は甘家で対峙していた。レプコンは吐蕃軍の後方に位置していた。のちに高僧の調停によって休戦が成立し，吐蕃の兵士たちはダルジャ山の山神に，感謝の意をこめて，弓・刀・矛・太鼓などの武器と軍旗を持って踊る歌舞と軍舞を奉納した。このことから軍舞と呼ばれる。

④ ཏུ་པའི་ལྷ་རྩེ།（トゥビ・ハツェ）について。『黄南民間故事』の中のツァモ村の神話伝説によると，「鉄囲山の頂点に巨大な菩提樹があった。その根は天の阿修羅の池にまで伸び，梢は玉皇大帝の住まう三十三天の上にまで達した。菩提樹は，長寿果をつける。毎回花が咲き，長寿果が結実するたびに，天間阿修羅と三十三天の神将神兵は争った。最初は戦いで神将神兵が敗れたため，玉皇大帝は金剛手菩薩に援助を要請した。そこで金剛手菩薩は十三位の軍神を推薦した。軍神たちはたちどころに阿修羅を破ったので，西王母娘娘を頭とする二十一位地母仙女を招いて盛大な祝勝会を開催した。のちに，十三位戦神のひとり伏敵神が人間界に転生して勇猛神将軍となった。そしてティソン・デツェンの御世，蓮華大師によってレプコンに送り込まれ，ツァモ村の山の護法神となった。このときに神舞を伝えたのである」（馬成俊 2003：364-365）。

また，ツァチェ村の伝説によると，はるか昔，レプコン地域には人に危害を加える多くの猛獣がいた。その後インドから飛来した鳳がそれらを調伏し，近くの西山に君臨（現在の同仁地域の最高の神山・シャチョン神山）するようになった。チベット語では鳳を（シャチョン・夏琼）呼ぶが，これがツァチェ村の主神である伝説のシャチョン神である。そのため，毎年ルロ祭はシャチョン神の祭から始まるといわれている。

以上の伝説からは，ルロ祭を考える際に欠かせない要素として，仏教が伝来する前のアニミズム的原始宗教とボン教，仏教，およびその伝来の歴史があると思われる。更に直接の成立要因として，唐と吐蕃の戦争の歴史を考えることができる。

3-2．ルロ祭の主体

3-2-1．超自然の神

歴史を展望すると，7 世紀にチベット文字が創出され，初めてインドから仏教が伝来した。その後 8 世紀になると，ティソン・デツェン王のとき，仏教が国教に指定され，チベットの最

初の僧院としてよく知られるサムエ寺が造られ，大量の経典がチベット語に翻訳された。これより，仏教は，全チベット地域に普及して行った。しかし，現在に至るまで仏教以前のアニミズムやボン教の神々を祀って来たことも事実である。それは日本でも同様であると思われる。例えば，三木は「古来，山は神聖なるものと考えられ，神や祖霊の鎮まるところと考えられて来た。農耕に不可欠な水は山から流れ出てくるが，その水を供給してくれる神が山に住むと人は信じ祈りを捧げてきた」(三木 2007：98)。

チベットはまた「世界の屋根」と呼ばれる。雄大な雪山や山岳，草原，湖，川の源流，高い峠，深い谷などの自然環境があり，そのためチベットの人々は，それらすべてにル(竜)やニェン，ツェン，サダク，シュダク，ユラと呼ばれる精霊が宿っていると考え，神山を「ネル」や「ラル」と呼び，一般的に登山はせず，神山を必ず時計回りに巡礼する。「これら荒ぶる神々の怒りを鎮め福を招くために，霊媒を通じてその意向をうかがい，犠牲を捧げて祈る。こうしたシャーマニズムの伝統をチベット人は培ってきた」(奥山 1991：133)。チベットの最初の王であったニャティツァンポは天国から降りて来て人間の王になったという伝説があり，その場所は現在のチベット自治区のラル･ジャントという神山である。また，「チベットのヤルロン地方に位置するヤルラシャンポ神山にはチベット歴代の王の祖先であるヤルラシャンポ神が住んでいると考え，何世代にもわたってチベットで強大な力を持つ神として祀られて来た。」(カルメイ・サムテン 2007：359)。これらのことから神山を祀る習慣は相当古いと考えられる。

また，チベットでは数え切れない神々が祀られている。中にはインドやネパール由来の外来の神，および原始宗教の神があり，それらはひっくるめて仏教に反抗した神々とされる。しかし，インドの密教行者パドマサンバヴァにより，強大な呪力で調伏され，逆に仏法守護を誓わせられて仏教の護法神あるいは精霊となったといわれている。

これらの山神は，山が高いほど神格も高いと考えられている。ルロ祭の時礼拝の対象となるものには，本村土着神以外のチベット全地域の守護神である大神ニェンチェン・タンラ神，マチェン・ボンラ神，また同仁全地域の守護神であるシャチョン神やダゥロン神などの神々があるが，これらはみな山神である。

また，これらの山神には，過去に実在した集落の長と集落のため戦争で死んだ英雄，地域外部の政治権力機構（たとえば吐蕃政府）に任ぜられてその地域を統合した人物などの霊魂が神に祀られたものがあると考えられる（別所 2004：132-133)。ある一定の能力を持った人々が死に際して深い怨恨をもったり，不慮の死にあったりすると，霊魂が適切な輪廻に入らず，浮遊霊となり，祟りや災害をもたらしたりする。それらの霊に対して活仏（高僧）が折伏し，加持を授けることによって，それらの霊は神々の地位を得る。これらは常によく祀れば人々に恩恵をもたらすが，祭礼を怠ったりすれば逆に災をもたらすものと化す。

ワォッコル村が祀る主神はダルジャ神とニェンチェン神，ユト神，氏神ジョエ神，タフセル・ドルジェ・パモ神などである。ダルジャ神の由来は，ダルジャ山と呼ばれる山で，この山はア

ムド地域では有数の高山であり，ダルジャ神の居場所とされる。「ダルジャ神山は循化サラ族自治県県都の東南部に位置し，県都から 52 キロメートルの距離がある。冬季は雪に覆われ，夏季は常に雲に覆われている。標高は 4636 メートルでダルジャ神山の東南部には漢語で五山池とも呼ばれるダルジャ湖がある。円型で周長は 485 メートル，水面の面積は 1.85 ㎡，水深約 10 メートルである」[9]。山を越えると甘粛省のガンジャ草原が広がっている。ダルジャと呼ばれるが，チベットの歴史文献などによると実際の名はダジャルである可能性が高い。「ダジャル・マンポジェ将軍は吐蕃時代，紀元 653 年にガル大臣と一緒に徴税を担当し，659 ダルジャ湖のほとりで 1,000 人の吐蕃軍を指揮して 8 万人の唐軍と争って大勝利したが，残念ながらダジャル将軍は戦死した。その後吐蕃軍らが彼の英雄の姿を永遠忘れないため，当時の風習に基づいて石の墓を造り，ダルジャ神として祀ることになった」（ソンディラプジェ1999：573-574）。

また，ダルジャ神山周辺の漢民族の伝説によれば，明の時代太祖朱元章が戦争で亡くなったとき，人々の心のなかにこの英雄の姿が残り続けたため，閻魔様の許可を得て彼の霊が土着神になり，五山大王，五山池の竜王として供養されて来たと言う[10]。

チベット・アムド地方では各村落に，神々を供儀招請するサンペ（祭祀書）がある。それらは各地域のラマ（高僧）により書かれた物である。ワォッコル村の主神ダルジャ神とニェンチン神，ガセドゥ村の主神バゾン神(二郎神)，ハラバトル村の主神ヘリランなどの「サンペ」[11] には神々の面相と持ち物，騎乗する動物の様子が以下のように詳細に記述されている。以下，日本語訳は筆者による。

ダルジャ神よ，
五宝倉庫の財神
白赤青三色の騎馬者
三兄弟の首領ダルジャ神
財主のダルジャ
氏神のダルジャ
またロサル・ギャツォ僧侶が書いたアニ・ダルジャのサンペ
主神のダルジャ神
赤い馬にのり赤い顔
右手に宝剣を持ち
左手に聖旨の紙を持ち
身に金の甲冑を着ける
英雄の武力を具え
八大軍部の兵士に囲まれ
豊富な神通力で衆生を守る

（後略）

循化県ドウイ谷の村人のアニ・ダルジャのサンペには，以下のようにある。

白馬に乗り
面相は白くて親切
官帽をかぶる
左手に財産のノルブ（宝物）を持ち
右手に矛を持ち
腰に太刀と虎皮の弓入れをかけている。

この「サンペ」によると，ニチェン神の面相と持ち物，騎乗する動物の様子は以下のようである。

ニチェン神よ
蔵・漢両地の境に居て
青空を屋根として
罪人の骨を玉座とし
悪人の皮を絨毯にする
太陽と月を左右に置いて
黒褐色の上着を着る
風速の羽のような黒馬に乗り
黒白の雲の境に居る
東方のニチェン神よ
（中略）
仏と変わらぬパドマサンバヴァの
仏法守護を誓い
アムド・カムの東方を守り
ニチェン諸神へ祭る
王妃と王子様へ祭る
部下の地主，竜，ニェンなどへ祭る
我々の供物を楽しみにして
我々凡人と家畜などを
永遠に守りたまえ

昼夜すべて守りたまえ
往来の旅を守りたまえ
二本足の人間の病気と
四本足の家畜たちに被害など被害を及ぼすことなく
十方の敵，疫病，悪運などを
追い払って欲しい，
貴方にお願いしたのは
悪魔の軍隊を粉砕し
パドマサンバヴァの約束を身につけて
四大善行の願を早速に実行するよう……（後略）

ガゼドゥ村の主神アニ・バゾンは，同仁県各地で信仰されているアニ（神の敬語お爺さんの意味）・バゾン（漢語で二郎神），あるいはアニ・マフホン（将軍）であり，伝説によると，中国漢族地域からアムド・レプコン地域にやって来た強大な力を持つ神である。中国の漢族や土族，チベット族などの中で普遍的に祀られている（漢語では二郎神，土語ではマホン神）。民族や地域によってその面相や持ち物などに若干相違点が見られる。また，アニ・バゾンはダルジャ三兄弟の一つで，ガセドゥ村の他にレプコン地域に祀る村や人が多い。これに関して地元の「サンペ」に以下のような記述がある。

スツォ（現四川省の灌口）という地域から，
十万の神力でアムド地域に来て，
蔵漢境界地域の敵神になり
レプコン地域の土地神になり
アニ・バゾンとよく知られ
また，
大神の土地神二郎神
東方漢地の宮殿で
皇帝のところから
入蔵することを誓い
同仁地域に入り
皇帝との誓いを守り，
名前はアニ・バゾンと言い……（後略）

将軍バゾンルランが漢地からアムド・レプコン地域にどのように来たかについては，以下の

ような伝説がある。

清の将軍のアニ・バゾンは皇帝の意思に沿わず，戦争で敗北した結果，皇帝がアニ・バゾンを懲罰し，手足に手錠をかけ，宮殿外に追い出した。アニ・バゾンは今のガセドゥ村があるところで死亡し，霊が地元の神になった。当時様々な奇跡が現れたため，地元の人々が次第に生き物の血肉を捧げ，土地神として祀るようになった。

他の伝説によると，アニ•バゾンが宮殿から追い出されたのは，〝宮殿の財物管理〞を担当し失敗したためで，アニ・バゾンの兄弟であるグモルランも懲罰を受けて，一緒にレプコン地域に入った。死後アニ・バゾンはガセドゥ村の土地神になり，アニグモルランはニァントフ村の土地神になったという。

面相や持ち物，その騎馬などは地元のサンペの中には，以下のように示されている。

銀白色の馬に乗り，
金色の甲冑を身に着け，
金の官帽を頭にかぶる
額に宝鏡を具え
赤顔で三目の者
右手に鋭い宝剣を持ち
左手に馬の手綱を持ち
周囲は無数の兵士に囲まれ
豊富な神通力が現れ
マホン（将軍）・バゾンという……（後略）

また，ハラバトル村の主神であるヘルラン神はダルジャ三兄弟神の中で 3 番目で，ハラバトル村の「サンペ」の中には，以下のようにある。

三世勝利のうちにある文殊菩薩
衆生を守るために，
天国の天帝と人間の皇帝の
聖旨の約束を守る，
大いなるヘルラン神よ……
面相と持ち物は
場合によって変わる体色
守護神の形で表す時
顔色は白くて赤い

笑顔でノルブ（宝物）を持ち
衆生を助けてくれる
財主将軍のヘルラン神
敵神の形の時
激怒の顔黒赤の色
牙をむいて敵の方に
赤黒の目で十方を睨み
黒色の甲冑をつけ
黒い官帽を頭にかぶる
右手に敵を殺す宝剣を持ち
左手に馬の手綱を持ち……
活き活きしている暖かい心
祖先から信仰して来た強い神
周りの王子様と王女様
命令に従う殿内の大臣と内閣
敵軍と争う外の将軍
軍隊訓練と誘導する将軍
倉庫を守る殿内の守軍
料理と酒を作る召使
牛馬の家畜を飼う牛追い
万空の神々へ
虎と豹と熊など野獣の供物
弓矢と矛と甲冑など武器の供物
銅鑼，太鼓，法螺貝など楽器の供物
絹織物と旗の布類の供物
杜松と松の木などの供物
三白と三甘の食べ物の供物
山羊と羊など血肉の供物
茶類と酒類の供物
燈明と線香の供物
良い匂いの薬草などで供養をす

以上のように「チベット各村ではこうしたサンチョ（サンペはサンチョの本）の記述を手がかりに自分たち村の神々を図像化したタンカ（仏画）や壁画を製作」し，（別所 2004：129）諸

神に人々の安寧と農業の豊作を祈願してきたと考えられる。

3-2-2．ハワの存在

ルロ祭の時，主導的役割を果たすのはハワ（憑依型シャーマンまたは霊媒）である。シャーマンはシャーマニズム研究では「憑依型」と「脱魂型」に二分されているが，ハワは明らかに「憑依型」である（宮本 2006：2）[12]。チベット語で，トランス状態になった場合をハワ（神の人に相当する）と呼び，トランス状態になっていない時はトンリ（役人）と呼ぶ。ハワは，漢語で法師あるいは巫師と訳される。

チベットのハワは仏教伝来以前のシャーマニズム的信仰やボン教の儀式でも，欠かすことはできない部分であったと考えられる。8 世紀ティツク・デツェン王の時代に仏教が国教に指定され，インドから密教の行者パドマサンバヴァを招いて土着神霊の鎮撫を行ったとき，パドマサンバヴァが最初に霊媒を通じてその意向をうかがい，ハワの組織を確立したと言われている（カルセジャ2009：245-249）。

ハワの成巫過程の特徴は，活仏あるいは高僧により「神の扉をひらく」（ハゴチェパ）儀式が行われ，トンリとして認知されることである。癲癇の発作を起こしただけではトンリとみなされず，実際「悪魔の憑依」と認定されることもある。民間人であるトンリは，日常生活の中では一般の村民と変わらず，農業や牧業などに従事し，特定の祭りのときに限って地位が高い霊媒になる。ハワの地位の高さは降ろす神の地位に比例するが，その頂点には転生ラマ（活仏）がいる。ハワはルロ祭の期間中，祭りの踊り手を統合する指揮者の役目をはたす。ハワは神が降りる媒体となることで，病気の治療に関するアドバイスをしたり，村の紛争を解決したり，事故や不幸の厄払いなどをする。ハワに降りた神は特別な祭事の期間中に限ってハワを通して話ができるが，普通は直接村人と会話できないため，年寄りらがハワの手ぶり，胸を叩くなどのしぐさで神意を伝える。ハワは村における精神的支柱であるため，村人は祭りの際には，神仏のように礼拝する。

トンリの選抜には血縁と緊密な選抜方法がある。同仁地域のルロ祭を行う各村にはそれぞれ一人か二人のトンリがいる。いつかそのトンリが高齢となり役を果たせない場合，および死去した場合には，新たなトンリを選ぶ。その際，ルロ祭など村の祭事を維持運営するため村長や年寄らが，兄弟村や隣接の関係がある村のハワに本村の新しいトンリの選抜を依頼する。隣接する村のハワが，ルロ祭などで村人全員が集まっている際，まず，神々へサン（香木）を焚いて供養する。次に，トンリの候補として 15 歳から 40 歳までの男たちをマホンカン廟内に集め，神像の前に座らせる。ハワが杜松の木の葉や線香などに火を点け，その煙でトンリ候補者の身体を清める。また，候補者の上半身を裸にし，ハワが酒と麦を体にかける。更に，村の年寄りらはガンワという経典を読む。周囲に坐した村人が太鼓や銅鑼を叩き，神の名前を大声で呼ぶ。その中で候補者は，本村の神に一心に祈る。すると候補者の中には，気分が悪くなり，吐き気

をもよおし，膝が震えだしトランス状態に入るものが出る。最後にそれらの候補者の中から一人あるいは二人が選ばれる。あるいは，村長や年寄らが，トンリの候補者を活仏のところに連れて行って神が憑依したのか悪霊が憑依したのか判定を依頼する。活仏の判定後も繰り返し他の高僧らがトンリを導くことによって「神の扉をひらく」儀式が行われ，そののち託宣を告げられ，本物のトンリになる。

ワォッコル村のトンリであったシャウナンジャ氏は 1936 年に生まれ，1950 年代トンリになったが，文化大革命の時期に迷信旧俗として批判され，経文や太鼓などの道具はすべて焼却されて刑務所に収監された。1980 年以降信仰が自由化された後，村に戻ってトンリの仕事を続けてきたが，90 年代に歳をとったため引退した。その後の 3 年間ワォッコル村にはハワがなかった。そのため村長や年寄らがルロ祭の時，ガセドゥ村のハワにトンリ選抜の依頼をしたが，ガセドゥ村のハワは，「1 年の後，自動的に村人から一人が神がかりになって出てくる」という予言をした。

ちょうど一年後，前トンリの娘婿であるニャンチャ・フジャが突然神がかりになり，ワォッコル村のハワと認められた。その後，村長や年寄らがトンリを，レプコン地方の有名なシャルツァン活仏とシャルドン活仏，ツォドゥ活仏など高僧のところに連れて行き，活仏らによって金剛杵がトンリの頭に置かれ，舌の上に宝瓶の甘露を垂らす儀式が行われた。赤い護身紐が首にかけられ，今後チベット全地域の人々，ワォッコル村 9 部落の村民の平和と幸福のために，「神の扉をひらく」儀式を行ってワォッコル村のトンリと正式に判定したのである。それ以後，トンリはルロ祭の時，主にダルジャ神とニンチェン神を憑依してルロ祭を指導するようになった。

神の託宣の例として，次にワォッコル村のハワの託宣を以下に記す。

「ああ，愚かな人々よ，ああ，愚かな人々よ，現代の人々は，信仰している人より，信仰していない人が増えているぞ。白い髪の年寄り，白い歯の若者たちよ，よく聞け，私は豊穣のため上からの豪雨や下からの強風，人間の疫病，家畜の損失などを防ぐため，一日で鉄製の靴と鉄製の服が破れてしまうほどだ。お前たちも知っているだろう。恩あるシャルツァン活仏とシャルドン活仏，ツォドゥ活仏などの活仏が金剛杵をわが頭に置き，わが舌の上に宝瓶の甘露を垂らし，赤い護身紐をわが首にかけて今後チベット全地域の人々，更に，ワォッコル村 9 部落の村民の平和と幸福のために，仏法を守れと訓戒を下さって，管理を任せたのだ。私のことを聞き，そして助けるか。いうことを聞かないと罰を受けるぞ。若者たちよ，飲酒と喧嘩に気をつけよ。女たちよ，村内の出来事を村外に喋ってはならぬ。村外の出来事を村内で言ってはいけない」。

3-3．ルロ祭の運営組織

ワォッコル村とハラバトル村，ガセドゥ村の三村は伝統的にマパ 7 つのチベット村に属し，

千戸に属する。村は血縁関係を持ついくつかのツォワ[13]から構成されている。これまではハワの下でカゴワ[14]とキュダク[15]などが協力をして，祭りを行ってきた。しかし，現在は行政区分として三村とも保安鎮人民政府に属しており，それぞれの村には共産党書記が置かれている。そのため，人民政府も祭の開催に関わり，その運営組織は書記の下に村長，村長の下に何人かの（人民公社時代の小隊）隊長から構成される。本村出身の公務員や職員のカゴワも数人いる。この両方が協力して祭りを行っているが，現在では伝統的な組織より行政組織の方の力が強くなってきていると考えられる。

3-4．マホンカン廟（将軍屋）とルロ祭の祭場

ルロ祭を行う祭場は，主にマホンカン廟とマホンカンの前広場であって，ユルカと呼ばれている。ルロ祭の期間以外には，収穫時に村の共同の脱穀場として使われている。また，ルロ祭以外の春節の行事などにもよく使われている。ワォッコル村では2010年に新たな廟を造営したため，ルロ祭の祭場もユルカから移って新廟の庭になった。

マホンカン廟内の構成は，具体的に以下のようになっている，すなわち，屋根裏には仏画と大蔵経，活仏の写真などの三宝が納められている。その下にはタフサル・ドルジェ・パモ神，ハラバトル村の主神アニ・ヘルラン神，ワォッコル村のアニ・ダルジャ神，ガセドゥ村のアニ・バゾン神，ニェンチェン神，ニェンチェン神の妃であるママ・ラフグ神，その息子のタシ・ラタフ・ガルボ神とツィニェン・トンリ・ギャルボ神，アニ・ユトン神など村の諸神がある。また，アニ・マチェン大神の壁画などもある。階段の両側には近代的な二つの獅子の石像と二本のタルチョ（経文を印刷した旗），廟の後側には台所があり，庭の入口の両側にそれぞれ，ガルサンとマルサンの焼香台が設置されている。

ルロ祭を行う際には，観覧席の左側に政府関係者の客席が作られ，右側は入場料販売場と観光客の撮影場になる。階段は，三村の男の踊り手たちが並んで座る場所になる。女性のための観覧席は特に指定されておらず，広場の周りの地面や持参した椅子に座る。マホンカンでは，頂点に仏教三宝，下部に諸神の神像が配置されている。これはおおよそ，神々の地位が仏教の仏より低いことを示しているものと思われる。

政府関係者の招待席やチケット販売場，撮影場などが出現したのは近年のことであり，1949年の革命以後の歴史，すなわち政府の関与の増大や観光化を如実に反映していると考えられる。

4．ルロ祭のプロセス

ルロ祭りは大きく宵宮祭と本祭に分けて行なわれる。ここでは2011年に行なわれたルロ祭りについて時系列に沿って記述する。なお，記述の根拠とした資料・情報は，筆者の故郷における長年の経験と，とくに2011年7月18日から7月28日まで行った参与観察を通じて得たもの

である。

4-1．ルロ祭の事前行事および宵宮祭

5 月に入ると以下①～⑥のように儀礼や祭などが行われ，6 月のルロ祭り本祭に向けての準備が徐々に開始される。

① ツェトの儀礼

毎年旧暦 5 月のレプコン地域は盛夏になり，作物は穂を実らせるが，同時に豪雨や雷雨の季節でもあるため，村人はさまざまな工夫をこらし神々の力で自然災害を予防する。5 月 5 日に寺院の僧侶が読経を行い，行事の最後に，僧侶たちがツェト（柳の枝で作った人形）を村の田畑の高いところに西に向けて置く。それは，8 月下旬の収穫後回収される。

② チコルの儀礼

毎年旧暦 5 月 5 日は，薬師如来仏が衆生を病気から救うため人間を訪問する日とされている。この日の朝すべての水源において，薬師如来仏からの薬を得ることができると考える。家族は屋外に用意していた水で顔を洗い，また，男の年長者は家畜に朝の餌を食べさせるため家を出て隆務河の周辺で放牧しながら，河に入って水浴をする。若者たちも午前中川で体を洗う。村人たちは，供物を持参してお寺に集い，村長や隊長の下に僧侶の協力を得て，大蔵経を背負い，読経しつつ村落の耕地を歩いてまわる。田野の東南西北にそれぞれサン[16] を焚いて，五穀豊穣を祈願する。

③ ラップツェの儀礼

旧暦 5 月 15 日（村によって 6 月 15 日行うことも多い）には，ルロ祭の開始前の行事としてラップツェで儀式を執り行う。

ラップツェは各村の神廟の近くの小高い丘の上に必ずしつらえられているものである。山の斜面には，2 メートル四方，高さ 2，3 メートルほどの石造り大小不揃いの台座が 13 台（敵神 13 を意味する）がおかれ，その上に設えられた木組みの囲いに，弓矢や宝剣，矛など昔の武器と，木の枝に多色の布を飾った物などが多数差し込まれている。それらを羊毛で作った「ムタク」（縄）でつなげる。弓矢をかたどった 5 － 6 メートルほどの木のボールはダヒャンと呼ばれる。従来は各家の男子たちによって，5 月のラップツェ交換儀礼のためジャジョ村の森から切り出した木を，村の大工や美術家が加工し，虎皮や豹皮の模様を描きダヒャンを作成するが，近年は中国政府の森林保護政策によって森林からの木材の伐採が禁止されているため，市場から竹のボールを買って来て，ダヒャンを作る場合が多い。当日これを持ち寄ってラップツェに差し替える。ラップツェの前の石でできた焼香台に置いた杜松の木の上で

ツァンパ（ハダカムギの炒粉―チベット人地域の主食のひとつ），小麦粉，カダク[17]などを供えて火を焚き，酒や茶を撒く。そして主にハワや年寄たちがサンチョ（祭祀文）を唱えて山神を勧請する。法螺貝が吹かれ，経文と馬や虎など動物の絵を印刷した四角い紙片「ルンタ」を空中に散らしながらラップツェを三回，時計廻りに回る。「ラギャロー（神よ，勝利したまえ）」と叫び声をあげて神々を祝福する。寺院の数人の僧侶が山の麓に御経をあげる。山頂まで登ってラップツェ儀礼に参加するのは男のみであり，女はふもとから遠望する。

④　大パン小パン祭

6月17日と18日，ワォッコル村においては，小龍爺神と大龍爺神の行事を行う。17日午後5時頃，年寄りや若者がサンなど供物を持参して，龍爺神のタンカ（神絵）が置かれている家に集まる。まず，ハワ（シャーマン）が，新しい小麦粉を発酵させたものを手で練って，龍爺神の大饅頭・小饅頭という，大小数百の饅頭を作る。そして小龍爺神のタンカの前に大饅頭と小饅頭，杏，梨，花および穀物の穂などの供物を供える。その後，ジャルフソン（村人たちが神へ寄進した新大麦で作った酒）と呼ばれる一般的な大麦酒に，黒酢と水を入れて作った酒を用意する。ハワが小龍爺神の神像前と竈に向って太鼓を叩きながら読経する。次に，木あるいは山羊の角で作ったシャンモ[18]（占いの道具）を用いて占い，来年，龍爺神の仏像を置く家を決める。その後，ハワや村長，カゴワなど数20人が龍爺のタンカや供物などを持ってラウガ[19]（太鼓）とカルウガ[20]（銅鑼）を叩きながら村の背後にある山の頂にあるタフサルドルジェ廟に行き，ハワがすべての供物を供え，太鼓を叩きながら読経する。最後に，小饅頭を子供に配り，皆でジャフソン酒を飲んだあと解散する。18日の大龍爺神の行事は17日の行事とほぼ同じである。

⑤　準備の日

6月19日はワォッコル村の村長および各隊長，カゴワなど数人が廟内外，廟前の広場などを掃除し，廟の周りに五色のタルチョ（昔の軍旗）などを飾る。廟内では，ダルジャ三兄弟神やニェンチン神，ユト山神など諸神の前に，果物や，ツァンバで作ったラシェ[21]（大麦粉で作った団子），花など大量の供物が供えられ，祭事に使われる道具などが準備される。村人は自家で，供物や太鼓や民族衣装などを準備する。かつてはこの日ハワの下で，踊り手の若者4人が神輿を担いで隆務河の川辺に行き，サンを焚き，龍神に祈ったが，現在はこの風習は失われてしまっている。

⑥　ラチャンカ（神の酒）

6月20日朝7時頃村長と4人の隊長，カゴワなどの数10人がマホンカン廟に集まり，廟からダルジャ神のタンカを担ぎ出して礼拝の神舞を踊り，各戸を回り災難から身を守り邪気

を祓い，村の平和と家族の健康，五穀豊穣を祈る祭事を行う。各戸には神棚が設けられ，各戸がダルジャ神を家に招待する。サンを焚き，ダルジャ神を描いた絵画の前に酒，ヨーグルト，花，穀物などの供物を供え，礼拝して現金や酒などを寄付する。寄付金の金額や供物などについてはカゴワが記録し，本祭の時公表する。集められた寄付金はルロ祭の時に使われる。

4-2．ルロ祭本祭

本祭は 21 日から 24 日の 4 日間にわたって行われる。その内，１日目の 21 日は各村で行い，２日目と 3 日目はガセドゥ村とハラバトル村が年ごとに交代で主催し，4 日目の 24 日はワォッコル村の主催で取り行われる。

［6 月 21 日］ワォッコル村のルロ祭

7 時頃，村書記と村長，カゴワ，キュダクなどがマホンカンに集まり，ルロ祭の規則と期間中の安全対策などについて打ち合わせを行う。山羊を捧げる担当者（この人は前年度のルロ祭の際，ハワの前で今年度のマルサンに一頭の山羊を捧げると申し出て，ハワから許可をもらった人）はこの日一頭の山羊を殺し，サンを焚いてダルジャ神など諸神へ捧げる。

15 時頃，村の男らはマホンカンに集まり，ダルジャ神のタンカ，ハガム[22] などを廟から取り出して，神舞を踊りながら村の背後にある山頂のタンサルドルジェウンモ廟に行く。サンを焚き，時計廻りにエハ踊りを踊りながら廟を三周する。ハワと数人（4 人くらい）が東方のユト神山の麓に行き，ルタ[23] を燃やして来る。(村の伝説によると 1931 年民国青海省省長であった馬歩芳回族首領がチベットを侵略した歴史を記念するという)。高齢者や女性たちは山麓で待つ。

15 時 40 分，頃山の麓に下りて来て神々のタンカやハガム (神輿) を中心に円を描いてマホンカン廟の周囲を時計回りに三周する。ツムバ首領の部落血縁関係の踊り手 20 人ほどがチタルという神紙を持って中で回る。その中にタシ氏（70 歳）が一羽の鶏の首を切って血を神々へ捧げる。

16 時 15 分，「トゥジャフパ」という列の踊りを捧げる。

16 時 10 分，城外村の広場に移動し，ツムバ部落とワンジャ部落から出た二人が棒の先に登り，村人らは「ツムバ，ワンジャヤヤヤ」と叫ぶ。その後タシ氏（70 歳）が祝福をあげる。

16 時 20 分，保安街 (チベット語でトジャゴンカという) に移動する。ハワがユト神山の麓から下りて来て，ダルジャ神，ニチェン神など諸神のタンカの前にケルサンを焚き，老人たちが祝詞をあげる。若者たちが太鼓を叩きながら大声でダルジャ神を呼ぶ。そうするとトンリはトランス状態に入り，村人らがエハ踊りを踊りながらハワと神輿の周囲を 6 回まわる。軍事訓練のような踊りである。

17 時 00 分，交通警察の協力を得て道路が一時閉鎖され，四角形や円形に並んだ女性たちがカ

ル踊りを踊る。

17 時 25 分，ハワが神舞を踊り，その後，村人たちがハワに対する強い信心を持っているかをシャンモ（占いの道具）で占い，その結果が良ければ神託を告げるが，悪ければ観衆の前でナイフを使い自分の頭を切りつけ，傷から出た血を神々へ捧げ，自分が本物の霊媒であることを見せる。ハワの神託は以下のようなものであった。

「村人とよそ者たちよ。私（神）は，お前たちのことをまるで器の底に穴が開き水が漏れるのを防ぐが如く，お前たちのことを守り，願いをかなえてやっている。年寄が長生きし，若者が無事に成長し，豊作になり，財産を増やすことをかなえてやろう。人々が喜びながら祭りに参加し，決められた踊りを残らずに踊ると人々が喜ぶと共に神々も喜ぶのだ。一年を通して厄除けするために決められた分量の読経に励め……」

17 時 50 分，ロンボドントフ氏（74）がハワに対して祝いの言葉や願い事を述べる。

18 時 10 分，シャカロン村[24] の若者 7 人がニンチェン神のトフラ[25] を持ってくる。ワォッコル村の踊り手は歓迎舞を踊る。シャカルロン村の若者も一緒に行事に参加する。

18 時 20 分，すべての演目が終わり，ハワの下に並んで太鼓を叩き，エハ踊りを踊りながら村に戻る。帰り途では，町の商店の店主たちがサンを焚き，果物や酒，飴などの供物を供える。ハワにカダクや酒を捧げる。ハワがそれを受取り，酒やヨーグルトなどは地面に撒く。また店主たちに対してカタクをかけて祝福をする。漢民族の村とワォッコル村の境のところツムバ部落の一人がハワの前で祝詞をあげ，その後ハワが東北（漢村）に向けてルタを燃やす（漢民族との紛争より数多くの村人が犠牲になった歴史を記念するものである）。

18 時 45 分，マホンカン廟に戻り，男らは廟内に並んで座り，酒を飲む。

19 時 30 分，ハワがシャカルロン村の舞者を見送る。

[6 月 22 日]－ガセドゥ村のルロ祭

ガセドゥ村のルロ祭は 6 月 18 日から 24 日にかけて行われる。その内 18 日から 21 日まではガセドゥ村の村人のみが自村内で行うが，22 日から 24 日までは三兄弟村であるワォッコル村とハラバトル村の三村連合でルロ祭を行う。

[6 月 23 日]－ハラバトル村のルロ祭（ガセドゥ村とほぼ同じである）。

[6 月 24 日]－ワォッコル村のルロ祭

6 時 30 分頃，キュダクが銅鑼を叩きながら村を一周し，廟に集まる時間を知らせる。村の男性たちが大麦粉や小麦粉，花，ヨーグルト，バター，飴，穀物，カダク，酒類などの供物を持ち，続々と廟に集まる。7 時頃，村長やカゴワ，キュダクの指示を受けて焼香台に供物を同時に置き，火を点け，爆竹などを鳴らして神々へ供える。トンリや年寄りたちは下に香台を時計

回りに廻りながら，サンチョ（祭祀文）をあげる。酒やミルクティーを地面に撒く。

7時35分，廟内に集まり，トンリが仏像の前に向かって座り，カゴワが線香や杜松の木の煙でハワの体を浄化する。年寄りたちがダルジャ神のサンチョを唱え，若者らがトンリの周辺で銅鑼と太鼓を強く叩き，「アニ・ダルジャ神！」と名前を大声で呼ぶとトリンはしばらくして体が震え始めトランス状態に入る。ハワの下で男の参加者らは次第に諸神のタンカ（仏画）を外に取り出し，4人の踊り手が神輿を担ぎ，他の踊り手たちは後ろについて行く。踊り手たちは，最初は廟とハワの方を向き，その後，東南西北を向いて3歩前進し，3歩後退しながら飛び歩き，長袖の両手と左足を挙げて各方向に3回踊り，十方の諸神を招待する。

8時00分，かつてはハワが山羊を殺して祭祀儀礼を行ってきたが，近年，観光客の増加と村外の他者の批判，ダライ・ラマ法王をはじめとする高僧たちによる慈悲の教えや活仏の干渉によってマルサン（供犠）の数が激減しつつある。最近では，以下のような手順となっている。すなわち，まず，山羊を寄進する側が，自分の家から山羊を廟内に連れてきて仏像前の聖水で洗う。その後，再び自分の家に連れ戻し，自分の家で殺して内臓をきれいに洗ってから再び廟に運び，右側のマルサン焼香台に中に入れ，火を点けて神々への供養とする。

8時45分，廟に集まり，今年，2頭の山羊を寄付した二人に対してハワがカダクをかけて感謝の意を表す。また来年の犠牲の山羊の寄進者を探す。村人のうち5，6人が自発的に，寄進の候補者として手を上げ，ハワはそれらの人々に対して感謝のカダフをかける。最後に，ハワがシャンモで占って，来年に山羊を寄進する二人を決める。その後，村の工事や治安，農業，紛争など村人だけでは，解決できないことをハワに尋ね，それに対してハワが指示を与える。また，村長やカゴワ，キュダクなどに対して感謝の意を表してカダクを与える。また，翌年のカゴワやキュダク，職員キュダクなどを選ぶ。ハワは，善良な村人に対してカダクをかけて賞賛するが，悪人は処罰する。村の書記と村長，カゴワたちが年間の支出などを公に報告する。ハワがシャンモで占って真偽を識別する。さらに，ハワが，今後一年間の災害などに関する予言をする。例えば，以下のような予言がある。

「私は冬の第一の月にはパフォー（巨石の意味）谷の中に居る。夏の第一の月には高山の頂上と湖底に居る。皆の者，知っているか。私の恩師である活仏が花瓶を置き，口に甘露を飲ませ，首にカダクをかけ，護法と衆生のために頑張れと明言した。私はチベット上部地域のウツァン（ラサ）から下部地域の漢族地域まで全て29000の諸神と全ての29000の竜（ル）類を招待しているため，お前たちが今日多くの舞踊とパンや酒，灯火，線香などの供物で供養し，人々を喜ばせながら神々も喜ばせたら，村人の疫病，家畜の損失，自然災害などから助けてあげよう。このルロ祭りには15歳の若者から50歳までの年長者たちが参加しなければいけない。参加しない者には罰金をかけるべきである。善き心で信じながら私の名前を一回呼ぶだけで，私は君たちを三回見に来るだろう。」

特にルロ祭の規則や集合時間，開始時間などについて年寄りや村書記，村長，カゴワ，キュダクなどと相談する。最後にハワがルロ祭期間中の飲酒と喧嘩など注意事項について述べる。

10 時 20 分頃，午前の行事を終了する。

13 時 00 分，キュダクが銅鑼を叩きながら村を一周し，廟に集まる時間を知らせる。村の男性らが大麦粉や小麦粉，花，ヨーグルト，バター，飴，穀物，カダク，酒類などのカルサンの供物を持ち，続々と集まる。サンを焚いてからキュダクと村長などの指示を受けて，一部の人は廟内外に供物を供えて祭りの準備をするが，男の若者 20 人あまりがトゥラを持って村の入り口のところに集まり，ハラバトル村とガセドゥ村の村人たちを出迎える。

13 時 30 分，ガセドゥ村とハラバトル村の踊り手が次々と集まる。村の入り口で三村の踊り手たちが対面して歓迎の踊りを踊り，合流してからワォッコル村のアニ・ダルジャの廟に行く。この日はシャカルロン村の村人も来て，ワォッコル村の祭りに参加するが，シャカルロン村は元々ワォッコル村の一部であったので，特に行事は行われない。

14 時 00 分頃，三村の踊り手がワォッコル村のマホンカンに集まり，持参して来たサンを焚き，酒を撒く。また，法螺貝を吹き，鐘を叩き，サンチョをあげて神々を招請する。

14 時 15 分，ワォッコル村のトンリがダルジャ神の像に向かって座り，一心に神に祈りを捧げる。 3 村の年寄りの村人たちはトンリを囲みサンチョをあげる。男たちは銅鑼と太鼓を速く叩き，アニ・ダルジャの名前を大声で呼ぶとトンリの体が震え始めてトランス状態に入る。三村の男の踊り手たちがハワの下で一列にして順に踊り始める。

14 時 30 分，ゴルワジョワ（廟を回る舞）三村の男の踊り手たちは蛇のように一列に並び，旗手が先導する。後に従う者が銅鑼，太鼓など持って「エーハ，エーハ，ハヨーハヨーハヨ，ギ―・・・」と大声を出しながら長袖の両手と右足を同時に挙げて，内側と外側に交互に頭を下げて踊りを踊る。マホンカン廟を中心に 6 回時計回りに廻り，最後に三村のタンカの方に向けて四角に並んで礼拝の踊りを踊る。

15 時 15 分，トゥジャフパ（軍事訓練舞）が始まる。踊り手たちは四列に並び，一列は東に，もう一列は西に向かい，少年たちは銅鑼と太鼓，軍旗など持ち，隊列の前後に並ぶ。隊列の中央にワォッコル村の年寄りのカゴワの一人が将軍のように立て右手に柳の枝を持ち，大声で，（漢語）「啊！神聖太！頭上戴的花罩子，手里拿的花杆子，腰里系的拉繩袍，脚上穿的鉄子鞋，脚里結的鎖子甲」（日本語の意味は「ああ！神聖なる命令，頭に花模様を付けた帽子，手に花模様を付けた棒，腰に付けた綱のローブ，足に履いた鉄の靴，足に結んでおいた……」）と言うと踊り手は頭を下げ，大声で「グイ，グイ（はい，はいとい意味）」と答え，両隊が合流してから離れる。このような動作を 3 回，繰り返し，前後の少年たちは毎回軍旗を持ち，銅鑼と太鼓を叩きながら両隊の真中を走る。このように古代の兵士の装飾や軍隊の訓練，合戦などを模した踊りを演じる。また用いられる言葉が漢語であることからは，明代から清代にかけてこの地域

が軍の駐屯地であり，漢民族から大きな影響を受けた可能性が考えられる。

15時45分，ゴルワジョワ（廟を回る舞）が始まる。三村の男の参加者が，蛇のように一列に並んでマホンカンを中心に6回時計回りに廻り，最後に三村のタンカの方を向いて四角に並び，礼拝の踊りを演じる。

15時55分，20人の村の女性がチベット現代舞踊を舞う。これは，一カ月にわたり黄南州歌舞団のメンバーから学んだ舞踊である。

16時15分，同村の娘婿であるL氏が現代チベットの歌を歌う。同氏は，同県のカラオケ屋に勤める歌手である。

16時20分，三村の踊り手は各村を単位として年齢順に座る。三村のハワが，トランス状態になってマホンカンから出て来て指導する。この時，年寄りから一年間の三村のもめ事や事件などについてハワから提案を受ける。ワォッコル村の若い踊り手の数人が，キュダクやカゴワの指示を受け，ミルクティーや酒類を台所から運んで来て三村の参加者に給仕する。女性たちは特に座る場所は決まっておらず，観衆として広場の周辺に立つ。男性の参加者たちはチベット民謡を歌う。

16時35分，同村の男女26人が現代舞踊を踊る。

16時47分，カマル舞（針舞）が始まる。子供から中年層まで，ワォッコル村の踊り手らは自発的マホンカンに集まってカマル舞に参加する。ハワが針を酒で消毒し，順番に踊り手の頬の両側と背中に数十本の鉄製の長い針を刺して踊るものである。先導者が宝剣を持ち，後の舞者らは銅鑼や太鼓を叩きながら広場を時計回りで2回まわり，また隊列を組んで踊る。現地の人々によるとカマル舞は血を神に捧げる祭事であり，神々へ誠実な心を表すものである。また，一本の針が一頭の山羊を捧げる功徳と同じであると考えられており，参加者たちの疫病や悪運を払い，家族の健康と安全を守ってもらえるようになると信じられている。

17時00分，同村の小学生の現代舞踊が始まる。

17時13分，ガセドゥ村の踊りとロカル・ダワ・ジュニの舞（十二支の舞）を踊る。ガセドゥ村の踊り手はハワの下で，年齢順に並び，先導者が旗を持つ。踊り手は銅鑼や太鼓などを一緒に叩きながら6歩飛びながら歩き，身体の上半身を斜めに振るわせながら180°回転し3回敬礼し，次に逆回りし，再び3回敬礼して足を元のところにもどして踊る。この時間帯にワォッコル村の9人の踊り手たちは広場の西側に踊りの輪の中央にドリ（収穫用の丸石）とニェマ（小麦穂）を置いて十二支の踊りを踊る。年寄りの二人は座布団に座り，それぞれの銅鑼と羊皮太鼓を叩く。5人の踊り手たちは両手に長袖を握り，銅鑼と太鼓の音に合わせながら左方と右方向に回る。また，一人は赤い帯を頭に巻き，ドリに座ってお爺さんの真似をし，二人はそのお爺さんの左右で世話する真似をする。また，二人はニェマを持ち，もう一人は竹馬のようなカンシャンを足に取り付けてアニ・ダロエ……と呼ぶ。また，弓を射る儀式では，祖先の人々は大雨や落雷などの自然災害をどのように防いで来たかを再現する。この踊りは，十二ヵ月の農

業の様子を表現しつつ，その中での村人とキュダクの役割を表していると思われる。

17 時 30 分，同村の村民 T 氏がチベット民謡を歌う。

17 時 40 分，ハラバトル村の踊りが始まる。ガセトゥ村とワォッコル村の踊りはほとんど同じであるが，ハラバトル村の踊りは特別である。先導者は銅鑼を持ち，踊り手は長袖を両手に握り，銅鑼の音に合わせて口から「キッキーキ……キッキーキ……」という声を出しながら広場を一周する。ジェミカル（女性舞）の時間帯に三村の 15 歳から 40 歳にかけて女性の踊り手たちがこの踊りに積極的に参加する。他の集落では未婚の女性のみが参加するが，ワォッコル村の場合は年齢に関係なく，少なくとも各戸から一人が家の代表として参加することが義務になっている。三村の女の踊り手たちは民族衣装で盛装をし，6 列に並び，前列のみカダクを持ち，二人のカゴワが太鼓と銅鑼を叩く，踊り手たちは太鼓と銅鑼の音に合わせて身体を少しだけ振って，輪を作って踊る。この踊りに参加すると一年間の疫病を払い，不妊の女性は妊娠できるようになると信じられている。

18 時 10 分，同村の小学生が現代チベット舞踊を踊る。

18 時 15 分，同村の 21 人の女性と 1 人の歌舞家が現代舞踏を踊る。

18 時 35 分　同村の 25 人の女性が現代舞踊を踊る。これは一カ月間大学生から学んだものである。

18 時 45 分，同村の男の高校生 3 人が流行歌を歌う。

18 時 50 分，ハセ舞（神の踊り）がはじまる。三村の主神のタンカ（絵）を前に置き，踊り手は二列に並ぶ。三村のハワが太鼓と銅鑼の音とともに神舞を踊る。最後にタンカに敬礼する。

19 時 15 分，同村 4 人女性がチベット民謡を歌う。

19 時 25 分，同村大学生 S 氏が漢語の流行歌を歌う。

19 時 33 分，同村の 50 人の男女から始まり，観客も参加して海南チベット族のゴジョ舞（円を作って踊る）をともに舞う。

20 時 10 分，同村 Q 氏が漢語の流行歌を歌う。

20 時 20 分，カンシャン[26]（竹馬舞）がはじまる。三村の踊り手たち全員で輪を描いて踊る。ワォッコル村の踊り手三人が足に取り付けた竹馬に乗り，うち二人は先に歩いて回り，一人は弓を持ち，三週回りながら，「チェンサタンというところに行っている二人は誰ですか？」と繰り返し大声で尋ねると，三村の踊り手は「ロン・ウナンツォ（隆務万戸の首領）親子です」と一気に答える。その射手の踊り手はまた「アハ，アハ —— あなたたち二人はどこに逃げるのだ？」と言いながら弓を放つ。二人が「アー」と言いながら死ぬ真似をする。このカンシャンの踊りは，かつてレプコン地域の首領であった隆務ナンツォ（万戸相当）とマパ 7 村（千戸相当）の間に畑や水利権，土地の領有権などを巡ってもめ事や殺傷事件が起きたとき，ワォッコル村が大きな勢力の隆務ナンツォと争う力がなかったため，敵に対して呪術で対抗したことに由来する。

20時47分，シャンーモワ(耕作舞)が始まる。最初に三村の踊り手が輪になり，次に，ワォッコル村の中年の踊り手二人と，ガセドゥ村とハラバトル村からそれぞれ代表が一人ずつ出て来て輪の中心に並び，二つのグループに分かれ，二人が手を握り，一人は柳枝を持って手を上げながら大声でそれぞれの村名を呼ぶ。「こちらはガセドゥ村•バジャの居場所，そちらはハラバトル村・シャメイの居場所，あちらはワォッコル村・ツムバの居場所」と叫ぶと，三村の踊り手たちは大声で「了解した」と言いながら喜びを表す。そしてその四人が二人ずつのグールプに分かれて対座し，一人は最初に「ああ，小麦の豊作を願う」と言いながら地面から種を拾う真似をすると，相手が「ああ，大麦の豊作を願う」と言いながら種を拾う真似をする。同じように，「ああ，菜の花の豊作を願う……最後に五穀豊穣と豊かな財産を願う」と言う。その後4人とも立ち上がり，再び種まきの真似をして歩きながら「ああ，小麦の豊作を願う」，「ああ，大麦の豊作を願う……ああ，菜の花の豊作を願う……最後に五穀豊穣と豊かな財産を願う」と言う。最後に二人の踊り手が木の鋤を輪の中心に置き，木の鋤に赤帯や薄絹を掛けて若者の踊り手二人が引っ張り合う。もう一人は鋤を立たせて時計廻りに一周する。三村の踊り手たちは引っ張っている二人を家畜のように「早く，早く引っ張って」と言いながら長袖で叩く。シャンーモワの踊りは，過去に兄弟関係であった三村の祖先たちが最初にどのように畑や土地を分割し，どのように耕作したのかを再現しており，また農業用の家畜の苦労を体験し，村人が日々五穀豊穣を願っていることに由来する。

20時55分，アザラ舞（獅子舞）が始まる。ワォッコル村の小廟であるアニ•マンゴン神の廟から少年の踊り手二人は獅子と虎の仮面をかぶり，色とりどりの衣装を着て，手腕に鈴を着け，棒を持っている指導者の下で広場を通過し，村人が用意した十三の軍神のサンを焚いている間を何度も跳躍する。それからマホンカン廟に行き，ハワの指導の下に再度アザラたち二人が跳躍を繰りかえす。最後にハワが廟から突進して来て，広場にいる村人たちの前でドッショと呼ばれる神に対し祭祀の祝詞を唱え，束ねてある山羊の血が付いた長い棒を持ちながら，銅鑼と太鼓の音に合わせて時計回りに廻る。年寄りの一人がハワの前でサンチョをあげる。その後アザラとハワが広場から村の西側に突進し，紛争相手のガサル村の方向に向って，ドッショを燃やして一連の儀式が終わる。

村人によると同仁地域で最も有名なハワはワォッコル村のハワである。その理由は法力が最も強力であったからという。

以前，同仁各地域を含む黄南州のチベット族と土族やモンゴル族などの他民族のシャーマンたちが冬の祭事に集まり，活仏（高僧）の前で法力を使って鈴を鳴らす技を競い合った。このときに集まったシャーマンたちの中で，唯一ワォッコル村のハワだけが，手のとどかない屋根に飾っている鈴を鳴らすことができた。シャーマンたちの法力合戦で勝利したワォッコル村のハワは,活仏やレプコン地域のハワたちから高く評価され,レプコン地域のハワのトップになった。(ツェワンドルジェ2009：334)ところが，ワォッコル村のハワを妬んだガサル村のハワが,

毎年ルロ祭の最後の儀式でお互いに法力でドッショを燃やすことで，お互いの能力を競うことになった。

アザラ舞の由来については，異なる伝説があるが，特筆すべきは前述したように，ルロ祭の由来と関わることだと考えられる。唐と吐蕃は和平条約の成立を祝い，ダルジャ神山周辺に祭祀したところダルジャツォ（湖）から竜の象徴である虎と獅子が出現し，その出来事を記念するため，アザラ舞がレプコンのルロ祭の一部の内容になったと伝えられている。また，村の平和と豊作，疫病や悪運を払う祭事でもあるとも伝えられている。

写真　ワォッコル村のルロ祭

このように，ルロ祭は農業の収穫前後の旧暦六月に行う神々に豊作を感謝するための祭事である。「祭りに起源を持つこれらの行事は村人自身が村の神々を喜ばせるために行ってきたものである」(竹沢 2006：112)。3-1 ではルロ祭の語意の解釈より同仁地域でルロ祭を行う連合体(三村）や村落によってルロ，ルル（竜舞）及びルロル（歌舞），マッツェ（軍舞），トゥビ・ハツェ(六月神舞)などというように呼び名が若干違い，それらについていくつの伝説があるが，ルロ祭のプロセスや内容を考察するとルロ祭の演目の中には，竜舞及び歌舞，軍舞，神舞などの要素が含まれていることを示した。3-2 ではルロ祭の主体である超自然の神々について文献や三村のサンペの分析を行い，超自然の神々の中にはチベット文化圏全域で祀られている山神（ヤルラ・シャンポ神）と同仁地域の最高の山神（シャチョン神），将軍などが戦争で亡くなり，その霊をチベット・漢・土族とも祀られている神（アニ・バゾン神）があることを示した。これらのことは，チベット文化の共通性と地域差を表している。またハワ（シャーマン）になるために，厳密な伝統的選択方法を用いていることを紹介した。3-3 では，ルロ祭の実行のために村社会の中で伝統的なキュダクやカゴワなどの特別な役職を設けており，また村出身の公務員や職員のキュダクとカゴワなどの新たな役職も設け，新旧の役職相互の協力によってルロ祭を運営していることを指摘した。3-4 では，マホンカンとルロ祭の祭場の空間的記録に基づいて，一般的に土地神の地位が仏教の仏・菩薩よりも低いことを紹介した。4 では，ルロ祭のプロセスについて，筆者の記録をもとに，最初は村（各村）を単位とし各自の村内で行われ，最後の 3 日間は村落連合体(3 村共同)が順番に各村で行い，祀る神の兄弟関係を借りてコミュニティーを維持されていること，伝統的な部落内外が連合して祭りを行っていることを明らかにした。

つまり，文化人類学の調査方法である空間的・時間的記録を通して，ルロ祭の祭事儀礼を分

析すると，ルロ祭では，土地神に対して山羊，羊，鶏を供犠に奉げ，若者は両頬と背中数本の針を刺すなどボン教行事の要素も見られ,密教の修行者の読経には仏教の要素も含まれている。また，唐と吐蕃の戦争を記念する軍事訓練の舞や，弓で相手の部落の人を殺すのを擬した竹馬舞は，国と地域の紛争などを表しており，土地分配と農耕をかたどった演目では，三村の兄弟関係や生産に関わる関係が再現され，祭りを通してそれがより一層強調されていることが窺える。

他のチベット文化圏では，あまり見ることができない同仁地域の歴史，文化，生産，世界観などを包含しているこのルロ祭は，長い歴史の中で形成されて来たと考えられる。

5．ルロ祭の成立についての考察

同仁地域のルロ祭の由来に関して，口承伝説は幾つか残っているが，歴史文献などは非常に少ない。伝説の内容から分類すると，チベット全地域の原始宗教と仏教の伝来に関わる伝説と唐・吐蕃の戦争と関わる伝説の 3 種類に分けられる。一つ目はニャッティ・ツェンポ王（伝説上のヤルロン王家最初の王とみられる）の時，原始宗教として五つの起縁神と地神，家神，戦神，畑神などの神々に対して動物の牛，山羊，羊，鹿等を殺して供物として供える祭祀儀礼を元に祭りが発展して来たという。チベットの祖先らが更にその祭祀の演目を増やして毎年収穫の季節に数千頭の家畜の首を一気に切って血肉を神々にささげた。そして家畜から太鼓を作り，舞踊を踊ったのがルロ祭の原型であるとされている。

二つ目はティソン・デツェン王の時代（754〜796）に仏教が国教に指定され，チベットの原始宗教であるポン教の弾圧を始め，仏教をチベットに全土に広めた。その時落雷，洪水，凶作，疫病などが次々とチベット各地を襲った。これらはすべて，外来神（仏教の神）を信奉したため，ボン教の神々が怒ったからだが，仏教の神は，このような自然災害を防ぐ神通力を持たなかった。そこでチベット人は元のポン教の神々を喜ばせるために太鼓を叩き，供養した。その後，長い歴史を経てその祭祀儀礼が発展し，祭日も旧暦の六月に指定されたので現在「六月会」とも呼ばれるようになったと言う。

三つ目は争いの歴史である。ワォッコル村の氏神はダルジャ神であるため，村の伝説によると，ルロ祭はアムド地域循化県ドゥウイ谷のダルジャ湖，あるいはダルジャ神山から始まったとされる。この地域にはチベット吐蕃王朝のソンツェン・ガムポ王からティツク・デツェン王までの統治期間に，唐との間に甘家（青海・甘粛省境の甘粛側）で両国境守備軍が対峙し，国境紛争が頻発した。

唐と吐蕃は抗争を繰り返したため，人々は安心して暮せなかった。この事態を打開するために唐･吐蕃両皇帝，外交官と，宗教界のラマ（高僧）たち有識者が努力し，783 年と 821 年の 2 回にわたって唐とチベットの間で和平条約（会盟）が結ばれた。その席上では国境策定が行わ

れ，会盟の決議文は碑文に刻まれて長安とラサの 2 カ所に建立された。碑文には「吐蕃，唐の両国は現在支配する領域を守って，東方すべては唐の地に，西方すべてはまさに大吐蕃の地にして，これより後は互いに敵対し争うことなく，領域を侵犯することなく……吐蕃は吐蕃国において安らかに，唐は唐において安らかになさん」（石濱 1999：44-45）とチベット語漢の両文字で併記されている。感動した将兵が現在の同仁と循化県境のダルジャ（達日加），ティカ（貴徳）などに記念のチョルテン（仏塔）を建てた。

ダルジャ地区のユツァイ将軍はこの年の 6 月 16 日から 25 日のあいだに，チベット人の習慣にもとづいてケルサンとマルサンを神にささげ，停戦，災難防除，安居楽業などを祈る儀式をおこない，羊皮か牛皮製の太鼓をたたき蕃唐盟約を祝った。

これが，現在のルロ祭に発展したといわれる。現在はルロ祭では踊り手は手に弓・刀・矛・太鼓など武器と軍旗を持つが，これは当時の戦争で用いられたものだという。文献で分かるところは，ワォッコル村もチベット軍の重要な軍営であったこと，アニダルジャはワォッコル村の主神で，この山には 3 人の兄弟の山神が住むことであり，それらは，アニダルジャ・アニヘルラン・アニバゾン（二郎神）である。

以上，いくつかの伝説と歴史文献より，ルロ祭の由来は，チベットに仏教が伝来する前のアニミズム的原始宗教とポン教を背景とし，唐と吐蕃で間に行われた戦争がルロ祭を成立させる要因となったことを明らかにした。

まとめ

ルロ祭成立の背景にはボン教と仏教の関連，そして争いの歴史が存在することが指摘できる。成立の歴史と現在のルロ祭との結びつきについて考察すると，二つの伝説との関連から，祭では未だに，山羊や羊など生き物の犠牲供養や若者が針を刺して踊るなど原始宗教的な行事が行われている一方で，仏像が廟の上に奉置されている。ウガパや年寄らがガンワというチベット仏教の経をあげ，また祭の参加者はルロ祭をチベット仏教の活動として認識している。

三つ目の争いの関連から，現在村人は廟をマホンカン（将軍屋）と呼称し，アニダルジャ神やアニバゾン（二郎神）などの神々は元の将軍の霊である。踊り手はダルジャ山神に感謝の意をこめて，弓，刀，矛，太鼓など武器と軍旗を持って吐蕃時代の服装をし，長時間，複雑な軍舞を奉納する。一連の舞踊は唐と吐蕃との戦争過程や部落の紛争，村の歴史等を再現していると考えられる。

最後に，結論として，現在のルロ祭に見られる原始宗教およびボン教，仏教などの要素は，他のチベット文化に共通して見られるものである一方で，唐と吐蕃の争いはアムド地域独自の歴史であり，ルロ祭に地域性を与えるものと考えられる。

（チョルテン　ジャップ・歴史地域文化学専攻）

注

[1] アムド・カム・ウツァン　　チベット人は自らの居住地域を 3 地域に区分し，自治区西部のラサ・シガツェ方面をウィ・ツァン，自治区東部のチャムド地区・四川省甘孜蔵族自治州・雲南省デチン蔵族自治州・青海省玉樹蔵族自治州をカム，玉樹を除く青海省の民族自治州と四川省アバ蔵族自治州・甘粛省甘南蔵族自治州をアムドという。

[2] チベット語でマホンは将軍という意味で，カンは部屋あるいは宮殿の意味で神廟を指す。

[3] 霊媒あるいはシャーマンの呼称である。

[4] ケルサンは「白い供物」の意味で果物・小麦粉・砂糖・ヨーグルト・ミルクティーなど，マルサンは「赤い供物」の意味で生きた羊や山羊を指す。

[5] 後に文化大革命などの原因で寺院は移動せざるを得なくなり，現在地になった。

[6] 同仁県人民政府のサイトを参考に筆者が整理した。

[7] 山頂や村落裏山の斜面に弓や祈願文をついた長い棒が刺しこまれた石積の祭壇。

[8] 将軍殿という意味で現地で廟のことを指す。

[9] 青海省海東地区循化撒拉族自治県人民政府「五山池」
http://www.qhsmzw.gov.cn/E_ReadNews.asp?NewsID＝538（2011.9.5 検索）

[10] 筆者が 2011 年に行った循化地方の聞取り調査によってわかった。

[11] 供犠の際に神々の名前を読み上げて勧請するのに用いる祭祀文で，一般的に活仏など高僧が書いたものである。主に神々の由来，面相，持ち物，騎馬など記されている。

[12] 宮本神酒男 「チベットのシャーマニズムの様式」Web サイトを参考
http://mikiomiyamoto.bake-neko.net/tibetindex.htm（2010.7.8 検索）

[13] 村内の血縁関係で構成される親族のグループで，各ツォワごとに氏神を祀る。ワォッコル村には，9 つのツォワがある。

[14] ルロ祭の時，ハワと協力し合って祭に関する一年分の収入の徴収と支出，演目の増減，期間中の治安などを管理する役職。

[15] 年間を通して農作業の管理を行い，ルロ祭，夏の断食会，冬の念経会などの年間行事の収入の徴収および支出など管理する役職。ほかに，村の規則を破った者から罰金を徴収する。最近農業の衰退とともにキュダクの役割や影響力が弱くなりつつある。

[16] 一般的に杜松の葉（シュクパ）を乾燥させた物に麦焦がしや小麦粉，バターなどを焚いて神々に祈りを捧げる。

[17] 中国語でハタ（哈達），薄絹，チベット族やモンゴル族，土族などの仏教文化圏の民族が一般的には神や活仏，賓客などに贈る物，婚礼や祝日によく使われている。五つの色があり，普通は白色が使われる。

[18] 山羊の角や木で作られた二つの木片。それをハワが何度も地面に叩きつけ，組合わせを見て，吉凶を占う。

[19] 羊皮太鼓。村人自ら作った直径 20-30 cm の円形の太鼓の枠と柄は鉄製で，太鼓の皮は山羊と羊の皮でつくられ，絵師が龍や獅子などの模様を描いた片面太鼓である。柄の端には 3 つの輪がつくられ，それぞれの輪にはさらに 3 つの小さな鉄製の輪が取り付けられている。手首をまわすと輪が互いに触れ合い，音が出る。

[20] 銅鑼，直径 20 cm の青銅製円盤。周囲に縁どりをして，つり下げ紐（ひも）を直接手で持って桴（ばち）で打ち鳴らす。一般的には村長と村内のそれぞれツォワ（部落）のキュダクが持つ。

[21] 麦焦がし粉とバターを練り合わせて円錐型に作られた供物。

[22] 神輿，ルロ祭の際に主神の神像を納めて渡御する際，一時的に神が乗る輿であり，前後に担ぐための二点の棒が付いている。祭りの際には男の若者 4 人が担いで踊る。
[23] 長方形の木枠（中に対角線状に木を渡してある）の四辺にルタの紙を垂らした物。
[24] ワォッコル村から 7 キロメートル離れたところにある村。かつては，ワォッコル村の家畜の放牧地であったが後に定住が進んでひとつの村になった。ワォッコル村から分家していく時に，シャカロン村の村人に対してワォッコル村のトゥラを貸したため，毎年ルロ祭の 21 日に，シャカロン村人は，トゥラをワォッコル村に持ち帰る。祭りの最終日である 24 日にルロ祭が終了した後で，再びシャカロン村へトゥラを持って行く。シャカロン村の村人はワォッコルの寺院の祭日やルロ祭のなどの伝統行事に参加することが多い。
[25] チベット語で「先の神」を意味する。約 3 メートルの棒の先にそれぞれ村の主神の神の画が描かれ，その上にカダクや布を飾っている物。ルロ祭期間中各村相互の送迎に用いる。
[26] 手で掴む部分がない木製の竹馬のようなもの。棒を足の側面に布で装着して使用する。

引用文献

チベット語
カルセ・ジャ
2009『世間礼賛』中国蔵学出版社
カルメイ・サムテン
2007『蔵族歴史，伝説，宗教儀礼研究』上・下　中国蔵学出版社
ゲンドゥン・チュンペル
1980『チベット白史』青海民族学院少数民族言語系言語学部編集
ゲンドゥン・ハルザン
2007『熱貢遊記』甘粛省民族出版社
ジュメ・サンドゥ
2005『熱貢森格雄部落研究』民族出版社
ジュメ・テフチョフ
1988『隆務寺寺誌』青海人民出版社
ソンディ・ラプジェ　編
1999『中国蔵族文化芸術彩絵大観説明鏡』民族出版社
チョルテン・ジャブ
2011「同仁県ワォッコル村におけるルロ祭とその歴史的背景」COE チベット文化に関する国際ワークショップ　北海道大学
2012「同仁県保安鎮ワォッコル村におけるルロ祭についての民俗学的研究」『青海省民族学政治学核心季刊誌（攀登）』青海省新華印刷所
ツェワン・ドルジェ
2009「黄南文化芸術研究」甘粛省人民出版社
テンパ・ラプジェ
1982『安多宗教源流』甘粛省人民出版社
ラマ・ツェリン
2002『レゴン地方政教史』香港天馬図書出版社

ロプザン・キェルラプ
　2005『アムドレプコン政教源流』ニューデリ
ロプザン・ニンタフ
　2000「年都乎簡史」青海民族出版社

中国語
董克義
　2009『甘粛保安族史話』甘粛文化出版社
紅杏，張臣
　2002「青海省同仁県六月会―平和を願う祝祭」『人民中国』社　東方書店
黄南蔵族自治州概況編写組
　2008『黄南蔵族自治州概況』民族出版社
劉満
　2010「唐九曲及其相関軍城鎮戍考」敦煌学集刊編集社　第 2 期
馬成俊　編
　2003『神秘的熱貢文化』文化芸術出版社
青海省誌編集委員会　編
　1987『青海歴史紀要』青海人民出版社
王予波編
　2010『魅力青海』青海人民出版社

日本語
綾部恒雄　桑山敬己編
　2006『よくわかる文化人類学』ミネルウァ書房
石濱裕美子
　1999『チベット歴史紀行』河出書房新社
奥山直司
　1991「魔神信仰―チベットにおける神仏習合の一断面」『仏教の受容と変容 3 ―チベットとネパール』
　立川武蔵　編　佼成出版社
桜井義秀　三木英編
　2007『よくわかる宗教社会学』ミネルウァ書房
鈴木正崇
　2004『祭祀と空間のコスモロジー対馬と沖縄』春秋社
　2005「象徴の森の想像力―儀礼と祭」山下晋司　編『文化人類学入門』弘文堂
立川武蔵
　1991『講座仏教の受容と変容〈3〉』　チベット・ネパール編　佼成出版社
長野禎子
　1999「青海省黄南蔵族自治州同仁県（Reb kong）におけるルロ祭」『日本西蔵学会々報』(44)
　1999「神と人との交流の宴・ルロ」『季刊民族学』23
服部等作
　2006「東チベットからラサにいたる間の祭りと文化　アムドの六月会」〝ACCUnews〟(357)
　2008「アムドの「六月会」の祭とその聖なる標章 ―― 科学研究費•国際学術調査によるチベットの造

形と表現の研究」『広島市立大学芸術学部芸術学研究科紀要』⒀
別所祐介
2004「チベットの山神崇拝と村落社会 ── アムド地方の農業集落における一事例」『アジア社会文化研究 (5)』
2005「仏教は山に何をしたか？：アムド地方の聖山巡礼における仏教化の研究」『日本西蔵学会々報⑸』
2007「現代チベットの聖地巡礼から見る宗教復興」『広島大学大学院国際協力研究科国際協力研究誌』第 13 巻第 1 号

参考文献

中国語
崔永紅，張得祖　杜常順　編
1999『青海通史』青海人民出版社
丹珠昂奔
2001『蔵族文化発展史』甘粛教育出版社
得栄・沢仁鄧珠
2001『蔵族通史・吉祥宝瓶』西蔵人民出版社
黎宗華，李延
1992『安多蔵族史略』青海民族出版社
陽学政編
2002『中国原始宗教百科全書』（中国語）四川辞書出版社

日本語
石川栄吉ほか編
1994『文化人類学事典』弘文堂
沖本克己編
2010『須弥山の仏教世界（新アジア仏教史 09 チベット）』佼成出版社
川勝守
2010『チベット諸族の東アジア世界』刀水書房
佐々木宏幹
1993『仏と霊の人類学』春秋社
2000『シャーマンニズムの世界』講談社
塚田誠之編
2003『民族の移動と文化の動態―中国周縁地域の歴史と現在』風響社
スタン，R. A
1971『チベットの文化』岩波書店
スネルグローヴ，デイヴィッド
2003『チベット文化史』春秋社
山口瑞鳳
1987『チベット〈上，下〉』（東洋叢書）東京大学出版会

山下晋司編
　2005『古代と現代をつなぐ 20 モデル』弘文堂